（写真左より）里山での綱引き大会、展望台づくり、木工作業に挑戦する子どもたち

ボランティアの チカラをフル活用！

ＮＰＯ法人東京里山開拓団
代表　堀崎　茂

東京里山開拓団が救世軍機恵子寮さんと共に八王子の山林に通い始めて丸８年経ち、合計 57 回で延べ 300 人以上の子どもたちが参加してくれました。この活動は荒れた山林を里山として再生保全しながら、自然の恵みを生かして、自らふるさとをつくり上げるという「環境保全」と「児童福祉」の一石二鳥の試みです。

昨年、厚生労働省より、子ども家庭局長賞を授与されました（「第８回 健康寿命をのばそう！ アワード」席上）。児童養護施設を所管する省庁からの表彰は感慨深いものがありました。なぜなら現行の行政が「心のケア」と「退所後の支援」に大きな課題を抱える中で、本活動はお金に頼らずに自然とボランティアのチカラをフル活用する全く新しい試みだったからです。

私がアウトドア趣味が高じて荒れた山林に通い始めたのは 2006 年のことです。無心になって開拓作業すると心のもやもやがすっと晴れていくのを感じ、これは本当に必要とする人とおこなえば、もっと価値を発揮できるはず、と 2009 年に東京里山開拓団を発足させました。ただ、会員による開拓は進むものの、児童養護施設との実施はいろいろ打診しても進展がなく、悩める期間が３年続きました。やがてボランティア支援団体より救世軍機恵子寮の高田主任（現施設長）を紹介していただいてからはとんとん拍子で話が進み、2012 年１月に初実施できたのです。

里山では、幼い子ども同士が助け合って急な道を登るところをよく見かけます。焚火料理を食べながら、昔、親と食事に出かけた楽しい思い出を語ってくれた子もいました。自由時間には子どもたち一人ひとりに大人が寄り添いつつ、やりたいことをして過ごします。いずれも施設内ではなかなか見られない光景と聞きます。里山は「ありのままでいられるところ」と言ってくれた子もいました。心理の専門家でも子どもが心を開くまでには相当な時間がかかるものですが、里山では会ったばかりの素人の大人にも自らすぐ心を開いてくれます。

高田施設長はこう言われます。

「かつて子どもたちが施設に来た時の様子や背景を知っている私たちからすると、こんなふうに里山にはまる姿は胸にこみあげてくるものがあります。」

これから目指すはところは、まずは何より活動を継続することです。本活動は、支援者の何かを犠牲にして子どもたちを支援する・子どもたちは支援される、というものではありません。実際子どもたちは大人が考える自然遊びなどより、新たな道の探検、根っこ・石掘り、ツリーハウス・かまど・トイレ制作といった開拓作業自体に熱中します。子どもたちの方こそ里山保全と私たちの里山趣味を力強く支えてくれていて、いわば支援する・されるを超えた「お互い様の助け合い」の関係です。そんなお互いにとって大切な関係の強化こそが継続の鍵となるはずです。

里山を開墾して、畑をつくり、種蒔きをしています。「いのち」を育んでいくことも、次の活動への期待につながります

また、８年前小学生だった子が退所する年齢になり、会員に近い立場で里山開拓に参加協力する人になってくれるという嬉しいことが出てきました。もし会員として参加してくれるようになれば、後輩の子どもたちにも、継続してずっと里山に通える道筋が明確になるはずです。

さらに、自主事業として企業向け里山研修事業の立ち上げにも取り組んでいます。昨年、ファーストユーザーの SCSK ㈱様向けに、社会貢献、チームワーク、メンタルケアを里山で実践する１日研修を実施しました。この取り組みの主な目的は、助成金や寄付に頼らず継続できる NPO 運営モデルづくりにありますが、もう一つ、退所者を里山案内役として雇用し、就業体験や自立支援に役立てるという大切な目的もあります。

このような試みを重ねる中で、救世軍機恵子寮さんが「全国初の里山付き児童養護施設」として広く認知されることを願っています。そして、都内の児童養護施設から全国に約 600 ある児童養護施設へこの活動が認知され、各地で厄介者扱いされている荒れた山林を伐り拓いて、それぞれのふるさとをつくり上げていく……そんな想像が広がるばかりです。

2019 年 11 月 11 日（月）、「健康寿命をのばそう！アワード」の席上、厚生労働省より、子ども家庭局長賞が授与されました（後列左から４人目）

救世軍は
多くのボランティア
と
支援者のみなさん
の思いに
支えられています※

※社会福祉法人
救世軍社会事業団の
17 の施設（15 ページ参照）は
2019 年度に、
計 568 件（法人本部宛も含む）の
ご寄付をいただきました
感謝しつつ
ご報告いたします

Declare His Glory

「こどもまつり」の活動

渋谷小隊（教会にあたる）　江原美果子

2017 年 2 月、新しいビルに生まれ変わった渋谷小隊には、裏手に広がる公園の景観を生かした見通しの良い、また風通しの良い 1 階多目的ホールがあります。建築中から、この空間をできるだけ地域に開放したい、という願いをもっていました。小隊の前を通りかかる人、公園で遊んでいる親子連れに、この「教会」の存在を知ってもらうこと、ここが、安心して過ごせる空間であることをアピールすることを最初の目的として、どのような働きができるのか、小隊のメンバーと度々話し合いがおこなわれました。そして、日曜日の午後に、「こどもまつり」を企画することになりました。

「こどもまつり」当日は、まず裏の公園で、渋谷小隊バンド（ブラスバンド）による広告・案内をします。そして、小隊の入り口で配るスタンプカードが入場券となり、子どもたちはそれを持って以下の各コーナーを回ります。

公園側の駐車場には、おまつり気分を味わえる「スーパーボールすくい」を設置。早速たくさんの子どもが集まります。その側で「綿菓子」をつくって配ります。季節に合わせて、かき氷、ポップコーンなどメニューを少しずつ変えています。多目的ホールには小さい子どもが楽しめる簡単な「わなげゲーム」や「ダーツ」で点数を競い、その得点でおやつを選ぶコーナーがあります。また、「紙芝居」コーナーは、綿菓子を持った子どもたちが安全に座って食べることができるように、室内の公園側階段前でおこないます。これは、普段日曜学校で使っている聖書物語の「紙芝居」による福音の種蒔きです。ここは、親子で熱心に参加している人気コーナーです。

また「工作」コーナーは、地域の学童保育などで経験のあるスタッフが、いろいろなアイディアをもち寄って準備します。回を追うごとに内容が充実し、子どもたちは真剣に取り組んでくれます。小隊の正面になる駒沢通り側の窓はすべて開放し、小隊の女性たちによる「ミニバザー」コーナーで、通りがかりの人たちに足を止めていただけるような工夫をします。

「カフェ」コーナーでは、保護者に子どもを見守りながらしばし休憩していただけます。時には救世軍内外のゲストによる、折り紙や手品、フェイス・ペイントやバルーン・アート、英語でダンスなど趣向を凝らした応援も得られ、「こどもまつり」は、毎回 150 人前後の家族連れで賑わっています。

まつりの内容は、小隊の若手を中心に、具体的な遊び方を考えて準備をしますが、当日は小隊総動員で役割を分担し、子どもを温かい眼差しで見守る役目や、子育て中の親御さんとのさりげない会話など、教会ならではの安心感を得られる大事な役割をそれぞれ担っています。

2017 年 10 月に開始した「こどもまつり」は、2 カ月おきに開催され、近所に周知されるようになりました。さらに福音伝道の働きに力を注ぎたい、と知恵を絞っています。今、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、これまでとは違うニーズが生まれるかもしれないことも感じています。そのような中で、地域に必要とされる場所、心の拠り所となる小隊でありたい、と願うと同時に、一人でも多くの方にイエス・キリストを知る幸いと、救いの喜びをお伝えしたい、と思っています。

これからも小隊のメンバーと心を合わせて祈りつつ、神様の示してくださるビジョンにチャレンジしたいと思います。

1

2

3

■柏寿会　各地の小隊で、地域の高齢者をお招きして、礼拝・食事・娯楽・学びの時をもっている（写真は、杉並小隊）　…写真 1

■スポーツ伝道チーム　昨年のラグビー世界大会にあわせてニュージーランドから来日。都内各所でイベントを導いた（写真は、神田小隊）　…写真 2

■ 5 度目の来日　11 月 30 日（土）～ 12 月 10 日（火）、ニュージーランドより、ウエリントン・シタデル・バンドが来日。北海道・仙台・東京でコンサートや交流の時をもった。延べ 5,000 人以上の方々に「神の光」をテーマとした音楽を届けた（写真は、北海道・遠軽町）　…写真 3

ウエリントン・シタデル・バンド日本ツアーに参加して

バンドメンバー　ディクソン・マクミラン

私は今まで、青年方が他の人々のためにすべてを献げてお仕えする中で実る、素晴らしい果実を見てきました。神がわたしたちを愛する愛によって、互いに、信仰を土台にした堅固な関係を築くことができると信じます。

今回のツアーで、自らの信仰に励ましと力をいただきました。日本のみなさまの長年にわたる真実な信仰の力強さに触れることができたからです。

神は、常に私の人生に良いものを与えてくださいました。ですから、神を第一とする人生の力強さをみなさまにお分かちすることができます。神は、わたしたちの人生に対するご計画をもっておられるからです。

「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。そのとき、あなたたちがわたしを呼び、来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く。」（エレミヤ書 29 章 11、12 節）

互いの国の救世軍の働きの上に神の祝福をお祈りいたします。

救世軍は
さまざまな地域の
あらゆる世代の
人々に
開かれています

Declare His Glory